

臨床フィールドワークを用いた心理臨床学的研究
Clinical Psychology with the Clinical Fieldwork

研究代表者 東畑 開人 (D2) 教員 皆藤 章
研究分担者 内藤 みちよ (D2)・長崎 励朗 (M2)・中藤 信哉 (M2)
渡辺 潔 (M2)・國崎 貴弘 (M1)

〔研究目的〕

本コロキウムでは、臨床フィールドワークを用いて研究することを目的とした。臨床フィールドワークとは、心理臨床家が実際に外界のトポスに赴き、そこでの体験をもとに人間理解を深めることを指す。Jung(1963/1973)によるアフリカへの旅、あるいは河合隼雄(2005)によるナバホ・インディアンへの旅などを先行研究として挙げることが出来る。

本コロキウムは、昨年度『宗教』現象に着目した心理臨床に関する研究コロキウム」の継続として行われ、特に臨床フィールドワークとはいかなる方法論に基づいてなされるものであるのかを明らかにすることを目的として行われた。すなわち、具体的な心理臨床学に資する知を得ることを目的とするのではなく、今年度に関しては、まずは方法論的な検討を行うことが目指された。それゆえに臨床フィールドワークとはいかなる方法であり、その方法を用いることによって開かれる射程と限界について吟味することを目的とした。

〔研究経過〕

具体的にはまずは昨年度の成果を学会発表することを通して、会場とディスカッションを持ち、本コロキウムが現在に抱えている問いを明確にするということを行った。その結果として、「臨床フィールドワークの目的とは何か」という鋭い問題提起がなされ、本年度のフィールドワークの大きなテーマとなった。

そのようなテーマは、おのずとフィールドワーク自体の目的地に目的を置くのではなく、場所に対する目的意識を空白にしたままに、参加メンバーがそこに赴いた時にいかなる体験が起こりうるのかを実験的に施行するというアイディアへと結実していった。

その結果として、隠岐への臨床フィールドワークが計画され、7月20日から23日にかけて実施された。

その結果について、参加メンバーで議論を重ね、体験報告を執筆することを通して、本年度のコロキアムで得られた知見を記述するに至った。

なお、これらのフィールドワークは教育社会学の院生とともに行われ、その結果として心理臨床学や臨床の知そのものを相対化するという姿勢を備えながら行われた。このような試みを行うことによって、本コロキアムは学際的な色彩を帯びながら、知を見出すこととなった。

〔研究成果〕

以上の研究経過を通して、臨床フィールドワークの方法論的な特性として、「わたし」性と境界性という二つのテーマが得られた。

すなわち、臨床フィールドワークにおいては、研究主体の「わたし」に基点を置き、限界ある「わたし」に固有のテーマとして目的が設定されることである。クライアントへの援助に臨床フィールドワークは直接資するのではなく、心理臨床面接に望む心理臨床家の「わたし」を媒介にして、心理臨床面接へと資する方法であった。すなわち、心理臨床面接は、規格商品としての心理臨床家によって行われるのではなく、「わたし」性という限界を持った心理臨床家とクライアントが歩む固有の関係性によって営まれる。それゆえに、心理臨床家の「わたし」への探求としての臨床フィールドワークは心理臨床学の知として固有の位置づけを占める。

次に、隠岐島での体験は、「わたし」を異邦人として意識し、「わたしではないもの」「他者」を強烈に意識させられるものであった。このことは、研究参加者に共通したものであった。どこかの土地へと出向くという構造を持つ臨床フィールドワークという方法論自体に、「わたし」と「わたしではないもの」との境界性を呼び寄せる仕掛けが内在していることが明らかになった。このような境界性は、心理臨床面接におけるクライアントとの出会い/出会い損ね、あるいは無意識という異界の設定が内在化した深層心理学という知のありようを考えると、心理臨床学にとって本質的なテーマである。それゆえ、臨床フィールドワークという方法は、心理臨床学の最も中核的なテーマである境界性の探求という主題を背負った方法であることが明らかになった。

以上を明らかにした上で、次年度はより境界性に焦点をおいて、五島列島などの境界への臨床フィールドワークを行うことを予定して、本年度のコロキアムを閉じた。